

東大寺と等定

牧 伸 行

はじめに

東大寺に所属していたであろうことが判明する僧侶の数は、伝来する史料の数に比例して他の諸寺に比べ多いが、その数に比して正確な事蹟が伝えられている者の数は極めて少ないといえよう。さらに東大寺僧であり、かつ僧綱の一員であったにも拘らず、正確なことが伝わらない者も多い。例えば、東大寺の創建ならびに寺院運営に尽力した良弁⁽¹⁾でさえ、けっして事蹟が明確であるとは言い切ることが出来ない。このことは、本稿で採り上げる等定に関しても同じことがいえる。

ただし、等定に関してはいくつかの研究があり、その生涯については佐久間竜氏⁽²⁾によって、また梵釈寺との関係を中心には西口順子氏⁽³⁾が考察を行われている。一方等定の弟子としては早

良親王の存在が知られているが、早良親王との師弟関係については山田英雄氏による論考がある⁽⁴⁾。

この様に、等定に関する研究はいくつかみられるが、いずれも東大寺僧であり、実忠を師として天地院に住していた、また、早良親王の師であり桓武天皇の信任が厚かった、などの点において共通しているようである。

しかし、早良親王と桓武天皇両者の人間関係は、どちらかといえば相反する事柄であり、矛盾しているように思われる。すなわち、桓武天皇の同母弟であった早良親王は、桓武天皇の即位とともにその皇太子となったが、延暦四年（七八五）に藤原種継暗殺事件が発生すると事件に連坐して皇太子を廃されている。この事件の詳細は『続日本紀』から削除されているが、その理由は『日本後紀』弘仁元年（八一〇）九月丁未条の平城上皇の変に際して、藤原薬子とその兄仲成とを罪により宮中から

追放することを柏原山陵（桓武天皇陵）に告げた嵯峨天皇の宣命に、

又續日本紀所載^乃崇道天皇與^二贈太政大臣藤原朝臣^一不^レ好之事。皆悉破却賜^支。而更依^二人言^一。破却之事如^レ本記成。此^毛亦无^レ礼之事^利。今如^レ前改正之状。差^二參議正四位下藤原朝臣緒嗣^一。畏^勢畏牟毛申賜^久奏。

とあることから明らかとなる。そして、早良親王が御霊として畏怖される存在であったということは『日本三代実録』貞觀五年（八六三）五月二十日壬午条の御霊会の記事に、

於^二神泉苑^一修^二御靈會^一（中略）所謂御靈者。崇道天皇。伊豫親王。藤原夫人「吉子」。及觀察使「藤原仲成カ」。橘逸勢。文室宮田麻呂等是也。並坐^レ事被^レ誅。冤魂成^レ厲

と、その筆頭に見えることよりも明らかであるが、一方の等定が『三国弘法伝通縁起』巻中「華嚴宗」の項に、

實忠上足有等定僧都。是桓武天皇御師範也。

とあり、師弟関係にあったとすれば全く対称的であるといえる。

さらに東大寺との関係については、等定が東大寺別当であったことに關してはその記載史料に問題が生じており、加藤優氏⁽⁵⁾をはじめとする諸氏⁽⁶⁾によつて信頼性に関する疑問視されており再考を要する。従つて、本稿においては実忠との師弟関係や別当であつたことに關する真偽などの東大寺と等定との関係を

はじめ、早良親王との関係あるいは桓武天皇との関係について考察を加えてみたい。

一、東大寺における等定

東大寺における等定に關しては、実忠に師事し、天地院に住していたと考えられている。これらのことは『東大寺要録』（以後『要録』と略す）巻第四諸院章第四の「天地院師資次第」（以後「師資次第」と略す）に、

天地院師資次第 依^二古日記^一

僧正 良弁 次實忠資等定大僧都。資平仁已講。兼律宗（以

下略）

とあり、同書卷第五「別當章第七」（以後「別當章」と略す）にも、

第七

大僧都等定 實忠資 延暦二年癸巳任

寺務五年 同二、三、四、五、六、補任治四年云々

という記載があることから導き出されたことである。しかし、『師資次第』に關しては「依^二古日記^一」という注記が存在し、あくまでも伝説・伝承の域を出ないのではないだろうか。同じことは「別當章」にもいえ、等定についての記載部分は、その

内容が疑問視されている「舊次第」に含まれており、その別当就任に加え「實忠資」ということも再考を要すると考えられる。

まず、等定と実忠の師弟関係であるが、等定は天平一〇年代に東大寺の前身である大倭国金光明寺に入ったと考えてられている。また、奈良時代における得度・受戒の最低年齢はそれぞれ一五歳・二〇歳であったという指摘があり、これを等定にも当てはめることは可能であろう。

等定の生年に関しては詳らかではないものの、『日本後紀』延暦一八年（七九九）一二月庚寅条に等定の僧綱を辞さんとする上表文が収められている。その文中に僧綱に加わった年齢については「是以懸車之歳」とみえ、等定が律師となった延暦九年（七九〇）の時点で七〇歳、またこの上表文の時点での年齢については「當今年垂三十八」という表現があり、この時点で八〇歳前であったことが判る。そうすると、等定が生まれたのは養老四年（七二〇）頃とすることが可能となり、得度・受戒の年はそれぞれ早くとも天平六年（七三四）と同一一年（七三九）ということとなる。

等定と実忠の師弟関係を明らかにする上で、問題となる点として両者の年齢差が挙げられる。つまり、佐久間竜氏の計算では両者の間には五歳の年齢差が存在し、師である筈の実忠の方が年少であるという現象が生じるものの「いささかの躊躇を感

ずるが、否定しきることでもない」として、一応その師弟関係を承認する見解を出しておられる。⁽⁹⁾しかし、その年齢差は明らかに問題とすべきことではないだろうか。

等定の師である実忠であるが、『要録』巻第七雜事章第十所収の「東大寺權別當實忠二十九條事」（以後「実忠二十九條」と略す）によると実忠自身は良弁の弟子であり、天平宝字年間已降の東大寺の経営において先ず良弁の目代となったことにはじまり、少鎮・寺主・上座・修理別當等の寺内の要職を歴任している。さらに、後世においては権別當であったという伝承が生じるなど、その寺内での評価は決して低くはなく軽んじることとは出来ない存在である。⁽¹⁰⁾ただし、実忠の生年・出自等については何等明らかではないが、生年に関しては「実忠二十九條」によってある程度の推測は可能である。ただし、その冒頭には「東大寺傳燈大法師實忠^{年八十五}」とあり、一方その文末には「然則法師實忠。生年既入九十員矣。」という記載があることから実忠の年齢については二説が存在するのである。この「実忠二十九條」の奥付には「弘仁六年四月廿五日」とあり、弘仁六年（八一五）という年号には諸説が考えられているが、これをもとに計算すると、後者の場合が等定と実忠の年齢差が六歳となる。しかし、両者の六歳の年齢差は如何ともし難く、等定が受戒した二〇歳の時点でも実忠は得度が普通行なわれる

年齢にも達していないのである。さらに、前者の場合は両者の年齢差は一一歳となり、等定の得度の時点では実忠は僅か四歳でしかなく、受戒の時点であっても九歳に過ぎない。

つまり両者の年齢差を考えるならば、等定と実忠の師弟関係を素直に認めることは不可能となる。むしろ、等定が東大寺に入寺したとするならば、天平末年の段階で既に師位僧であった、安寛あるいは平栄といった良弁の後継者的な弟子たちとの師弟関係を考えた方がより自然ではないだろうか。

さらに、天地院との関係についてみると、「師資次第」では良弁から等定への継承が記されている。この天地院は、東大寺の東の山中に存在していたもので、前掲の諸院章によれば、「縁起文云。是文殊化身行基并建立也」と行基の創建になることがみえ、さらにその時期としては「始造三和銅元年二月十日戊寅。山峯一伽藍。即天地院。名三法蓮寺。」と和銅元年（七〇八）であったとされる。しかし、「師資次第」には行基の名は全く見えず、良弁より始まっているが、良弁が果たして天地院と関係があったのかどうかは不明である。そして、良弁の弟子であったことが認められる実忠への継承は行なわれず、孫弟子に当たる等定へと天地院は継承されている。このことは、実忠が二月堂の創建者として伝えられているためであろうが、むしろ「實忠資」として強調するように記されているのも両者を

結びつけようとする作為を感じる。ただし、「西琳寺流記」の「一當寺律法中興縁起事」には西琳寺が度々律院となった可能性を述べ、その理由として「等定僧都止當寺」としている。つまり、等定が律宗の僧であった可能性が生じるが、そうするとむしろ実忠よりも同じ東大寺僧であっても律宗の大学頭などを歴任した安寛を師としたかもしれない。

次に、先に挙げた「別当章」をはじめとする「別当次第」⁽¹²⁾においては、第七代の別当として記載されている。そして、等定の別当就任について佐久間氏は、遷都問題に絡む人事であり、等定を別当として東大寺に送り込むことで反対派の懐柔を行なったと考えておられる。⁽¹³⁾

「別当次第」の歴代別当の内、第二五代の済棟までの別当については「別当章」に、

私云。上件廿四代虚偽尤多。但依三舊次第一注し之。是依三無三印藏官符一也。自下別當。依三印藏官符一。始改三其偽一耳。

とある「舊次第」に等定も含まれている。この「別当章」については、既に指摘されているが内容については信頼に値せず、第七代の別当としては等定よりも、等定と同じく僧綱の一員であり、等定よりも早く延暦三年（七八三）の時点で律師であった玄隣の方がその時点での東大寺別当であった可能性が高い。

また、「舊次第」に記される歴代別当についてはほとんどの者に僧綱位が冠されているが、その多くは『僧綱補任』に「補任中不_レ見。可_レ尋」と注記されており、実在が疑問視される。

さらに、良弁については少僧都と記されているが、これは天平勝宝四年（七五二）段階での別当就任と伝えられる時点でのことであり、最終的には僧正であった。ただし、良弁に関しては、実際に東大寺の初代別当であったのかという問題も存在するが、その寺内における地位は実質上の寺家別当と同等のものであったと考えてもよい。

さらに、「舊次第」の中でもその別当就任が他の史料より確認できる円明・正進は、それぞれ嘉祥三年（八五〇）に律師、承和一〇年（八四三）に権律師に就任しているが、別当となつたのはそれ以前であり、「舊次第」でも大法師・大徳という表記が採られ、決して最終的な僧綱位が冠せられてはいない。これに対して、等定は大僧都として記されているが、等定が大僧都となったのは延暦一六年（七七七）以降のことであり、東大寺別当となったと伝えられる延暦二年（七八三）の時点では未だ僧綱の一員ではない。従って、別当として記される場合に、就任時点の肩書きで「別当次第」に記載されたとするならば、等定の別当就任は認めることができない。

『僧綱補任』には別当としての任期は「治四年」とあるのに

対して、「別当次第」では「寺務五年」となるなどその就任期間についても、史料によって錯綜している。また、その期間についても第八代別当である永覚と重複している。

以上のことから、等定に関して東大寺との関係は、実忠との師弟関係、天地院に住したこと、あるいは第七代の別当であったというような従来の見解を首肯する訳にはいかなくなる。むしろ東大寺とは無関係であり、東大寺僧ではなかったのではないかとこの疑問が生じる。

そこで、等定の本来の所属寺院が問題となるが、このことに関してはその記事自体に問題があるものの『七代寺年表』の延暦三年（七八四）の項にある等定の注記に「河内國人」とみえるのが参考になる。そして、「西琳寺文永註記」には、

一寺官事

四十八代

大鎮 神護景雲二年記云。大鎮僧等定。

五十代

少鎮 延暦八年帳ニ少鎮僧勝寵。

七十代

座主 康平五年記云。座主少僧都。

五十四代

別當 承和七年帳云。別當大法師無行。

(以下略)

という歴代寺官の記載があり、等定は神護景雲二年（七六八）には河内国の西琳寺の大鎮僧として史料に見えるのである。このことは、同書に引用されている「神護景雲二年状」をもとに記されたのであろうがそれにも、

衆僧御供養加益事

右頃年之間、頻遭旱兀難。供養猶乏少。今商量加口別四合。米定一升二合如前。

神護景雲二年八月一日

大鎮僧等定

大政人藏田長 少政人武生繼長

と、大鎮僧として見える。この記載に関しては、かつて井上光貞氏が考察されたようにその信憑性が認められるが、そうするとこの時期には既に等定は西琳寺の大鎮であったのであり、加えて西琳寺自体は王仁後裔氏族との関係が指摘されている⁽¹⁴⁾。等定自身が河内国の出身と伝えられていることを考えると、王仁後裔氏族との間に何等かの関係があったであろうことが想定できるのである。

また、「西琳寺文永注記」に見える「柏原天皇奉顯毘盧舍那丈六佛」という記事に関して、編者である惣持は「私曰」として「天平年中記正載此像」と注記しているが、これが認められ

るならば、等定の華嚴教学への傾倒も充分に考えられ、佐久間・西口両氏もそのように考えておられる⁽¹⁵⁾。

等定がたとえ西琳寺僧であったとしても、華嚴教学を学ぶために南都に遊学したという可能性はある。そして、当時の華嚴教学研究の中心が東大寺であったことに何等異論は無いものの、決して東大寺のみで研究されていたわけではなく、東大寺以外の僧であっても、例えば審祥・慈訓・慶俊といった華嚴教学に精通した僧もいる。それぞれ、日本華嚴の祖といわれる審祥と慶俊は大安寺僧であり、慈訓は興福寺僧、といったように南都諸寺で華嚴教学の研究が行われていたことが判るのである。また、東大寺以外の寺に住していたとしても、經典類の貸借は可能であり、実際『正倉院文書』には多くその例を散見することができる。

一方、等定と西琳寺との間に王仁後裔氏族としての関係が存在するならば、等定が東大寺へ入寺する必要は決してなく、むしろ同族の西文氏の一族の出身である慈訓（河内国人。俗姓船氏）や慶俊（河内国丹比郡人。俗姓葛井氏⁽¹⁶⁾）といった同郷の師僧の下で、華嚴教学を学んだと考える方が自然である。そして、等定の出自を考えると、大安寺への入寺の可能性の方が、東大寺であった可能性よりも大きいのではないだろうか。

二、等定と早良親王

東大寺と等定との間に従来通りの見解が成り立たないとする
と、その等定と師弟関係にあった早良親王との関係についても
一旦白紙に戻すべきであろう。つまり、等定と早良親王との関
係は、等定が東大寺僧であったということを前提の一つとして
いるのである。ここで、等定との関係をみる前に早良親王と東
大寺との関係についても再考を行なってみよう。

早良親王については、周知のごとく光仁天皇の皇子であり、
同母兄桓武天皇の皇太子であったにも拘らず正史にはその記載
が殆ど見られない。『続日本紀』宝龜元年（七七〇）十一月甲
子条に、

甲子。詔曰。（中略）又兄弟姉妹諸王子等悉作親王弓冠位
上給治給。（以下略）

とあり、詳しい人物名は不明であるがこの時に早良親王も親王
宣下を受けたと考えられる。その名が見られるのは同書天応元
年（七八一）四月壬辰条であり、

壬辰。立皇弟早良親王爲皇太子。詔曰。（中略）随法可
有使政止早良親王立而皇太子止定賜布。（以下略）

と、桓武天皇即位の翌日にその皇太子となっていることが記さ
れている。しかし、親王宣下を受ける以前についての早良親王

に関しては、正史には何も記されてはおらず、そのことが記さ
れる史料の数自体も限られてくる。

ここで、早良親王の親王宣下以前、および出家に関する史料
で主なものを挙げると、

史料①「大安寺碑文」（以降「碑文」と略す）

大安寺碑文一首并序

原夫六合之外、老莊存而不談、（中略）寺内東院皇子大禪
師者、是淡海聖帝之曾孫、今上天皇之愛子也、希世特挺際
神命世、爲徳固時建、道在人改、悲正教之陵遲、痛迷塗之
危幻、於是永厭生死、志求菩提、捨樂宮而出家、甘苦行而
入道、（以下略）

寶龜六年四月十日作 正四位淡海眞人三船

史料②「大安寺崇道天皇御院八嶋院兩處記文」（以後「記文」
と略す）

大安寺崇道天皇御院八嶋院兩處記文

白壁天皇第二皇子早良親王諱崇道、初以東大寺登定大僧都爲
師、寄住繙索院、生年十一出家入道、廿一登壇受戒、清潔
清淨、修練修學、以神靈量雲二年移住大安寺東院、以寶
龜元年奉親王号、以同十一年奉定皇太子、以延暦十一年、
造長岡京之門、不面之外、依御從右近衛將監大伴竹良、牛
鹿木積等所犯、横坐君主、於埒唐律院居小室、（以下略）

史料③『要録』卷第三

表云

世不羈者 文武天皇第二王子也良弁僧正弟子

崇道天皇 實忠之弟子並等定大僧都實白壁天王第二子也

眞如親王 安殿天王第三子弘法大師實

史料④『要録』卷第四諸院章第四所収、「**羅索院**」項

一、**羅索院** 名金鐘寺。又改号金光明寺。亦云禪院

堂一字 五間一面 在禮堂

天平五年歲次癸酉創建也。良弁僧正安置不空羅索觀音菩薩像。當像後有等身執金剛神。是僧正本尊也。光仁天皇々子崇道天皇。等定僧都爲師出家入道。廿一歳登壇受戒住此院。後以景雲三年移住大安寺東院矣。(以下略)

櫻會緣起云

伏惟法會本施主故僧正院下。(中略)昔者聞禪師王子住持此院。今見太子禪門居住此房。(以下略)

史料⑤『要録』卷第五諸宗章第六所収、「**東大寺華嚴別供緣起**」

東大寺華嚴別供緣起

夫玄門幽微莫若一乘。(中略)僧正臨終時。偏以花嚴一乘。付屬崇道天皇。々々敬受傳持不斷亦其力也。(以下略)

史料⑥『要録』卷第八雜事章第十之二所収、「**東大寺桜會緣起**」

起」

敬白大衆。青陽終月未明初節。(中略)昔者聞禪師王子住持此院。今見太子禪門居住此房。(以下略)

史料⑦『**三国弘法伝通縁起**』卷中所載、「**華嚴宗**」項

良辨僧正臨終以華嚴宗付崇道天皇。崇道受囑於大安寺建立東院弘華嚴宗。

史料⑧『**一代要記**』所載、「**光仁天皇**」項皇子

早良親王 第二子母同桓武神護景雲二年出家年十一住東大寺寶龜元年賜親王號天應元年四月爲皇太子年三十三延暦四年十月廢之配流淡路國於海上壽同十九年追稱崇道天皇

以上であるが、史料①の奥付を信用するならば、それ以外は後世の著述となり、内容も例外はあるものの大同小異である。以下、それぞれについて簡単に検討を加えてみたい。

先ず史料①であるが、これは現在亡失して碑自体は伝わっていない。ただ、その奥付によると、宝龜六年（七七五）四月一日に淡海三船によって作られている。「碑文」では早良親王の名は見えず、文中では「皇子大禪師」と表記され、「淡海聖帝之曾孫」「今上天皇愛子」と説明されている。これについては、山田氏によって早良親王であることが確認されているが、右の記載は全て早良親王に合致する。すなわち、宝龜六年の時点での天皇は天智天皇の孫である光仁天皇であり、早良親王は天智天皇の曾孫に当たり、何等問題はない。

ところで、作者である淡海三船は『続日本紀』延暦四年（七八五）七月庚戌条にその卒伝が見えるが、「刑部卿從四位下兼因幡守淡海真人三船卒」とある。確かに「碑文」の著作年である宝龜六年には存命していることは確かであるが、その位階が異なっている。「碑文」では「正四位」とのみありその官職は不明であるが、宝龜六年の段階では実際は正五位でしかないものである。ただ、書写の過程での誤写とすれば問題はないものの、如何とも判断し難く素直に当時の史料とみることはできないが、ここでは二応誤写の可能性を指摘するに留めておく。

そうすると、ここにみえる「皇子大禪師」は早良親王ということになり、親王宣下を受ける以前は大安寺東院の住僧であったことが判る。

次に、史料②から史料⑧であるが、これは大きく分けて内容の上で二つに分類することができる。

A ②③④⑧

B ⑤⑥⑦

ただし、史料⑥は少し趣を異にするが、Bの内容よりの派生であると考えられ、取り敢えず同一内容としておく。

Aの内容であるが、これに等定と早良親王との師弟関係が記されており、さらに史料③以外は後の大安寺への移住を記している。そして、Bは等定と早良親王との関係ではなく、良弁と

の関係を強調し、早良親王が良弁の後継者であったことが記されている。

ところで、史料⑧の『一代要記』について山田氏は「はるか後世のもの」と評されているが、これだけが出家および立太子の時点の早良親王の年齢を記している。この『一代要記』の成立年代は不明であるが、一四世紀頃までの記載を含むものの一三世紀にはその多くは成立していたと考えられる。史料②③④を参考に編纂されたとも考えられるが、あるいは別系統の史料によっていたとも考えられる。早良親王が神護景雲二年（七六八）に一一歳で出家したことは、天応元年（七八一）に三二歳で立太子したと矛盾するものの、早良親王が天応元年に三二歳であったということは、天平勝宝二年（七五〇）生まれということになる。確かに天平九年（七三七）生まれの桓武天皇と比較して多少年齢が離れているともいえるが、決して否定することはできない。すなわち、諸書に共通して、早良親王は光仁天皇第二皇子とあり、他の諸皇子と比べても、稗田親王は天平勝宝三年（七五一）、他戸親王が天平宝字五年（七六一）の生まれであり、第二皇子としての年齢には矛盾しない。

一方、史料⑤⑦⑧についてはそれぞれ良弁から早良親王への華嚴宗の付属が記されている。そのうち史料⑦はその奥付に、

于時應長元年辛亥七月五日於東大寺戒壇院述之

華嚴宗沙門 凝然 春秋七十二

とあり、応長元年（一一三一一）に東大寺僧である凝然によって編まれたものであり、史料⑤を史料として書かれたものと考えられるが、鎌倉期における東大寺もしくは南都での一般的な見解であったと考えられる。従って、この華嚴宗の良弁より早良親王への付属について記されたものは、管見の限り史料⑤が最も早いと考えられる。しかし、このBの記載内容は、先に見た史料①の記載とは矛盾し、「碑文」による限り「寺内東院皇子大禪師」とあり、東大寺との関係には何等触れられてはいないのである。

その得度・受戒の年齢であるが、「碑文」には何もみえないが、それぞれの年齢は史料②⑧に一一歳での出家が、史料②④には二一歳での受戒が記されている。早良親王が先にみたように天平勝宝二年（七五〇）の誕生とすると、得度・受戒はそれぞれ天平宝字四年（七六〇）・宝龜元年（七七〇）となる。得度の年齢については、奈良時代の一般的な例である一五歳という年齢を下回るようになるが、例外的な存在としてその可能性を否定することはできない。しかし、受戒が行なわれるまでに約一〇年の歳月を要しており、例え得度後受戒まで三年以上を経る必要があったとしても、余りにも長すぎるのではないだろうか。受戒が行なわれたとされる宝龜元年は早良親王が親王宣

下を受けた年ということになる。

さらに史料の記載をみると、得度↓受戒↓大安寺東院移住↓親王宣下という順序であったように解釈できるが、大安寺東院移住が史料にみえるように神護景雲年間に行なわれたとすると、移住後に受戒が行なわれたこととなる。これは、早良親王と東大寺あるいは等定との関係を無理に結びつけようとした結果生じた矛盾ではないかと考えられる。すなわち、先にみたように神護景雲二年（七六八）の時点では等定は西琳寺僧としてみえ、早良親王と東大寺と関係を主張するにはこれ以前である必要があったのではないだろうか。そして、「実忠二十九ヶ条」では宝龜二年（七七二）、その他の史料にも宝龜四年（七七三）には「禪師」という称号が付せられているが、親王宣下と同時に早良親王は還俗していたとも考えられ、尊称として使用されたと考えらる。

ところで、早良親王のもう一人の師である実忠との関係であるが、両者の交流は史料により確認できる。しかし、そのことが記されている「実忠二十九ヶ条」をみる限りは両者の間に師弟関係があったとは考えられない。「実忠二十九ヶ条」には早良親王とは記されず、親王禪師という表記が取られているが、親王禪師は実忠に対して第四条では「尔時親王禪師。并僧正和尚。相語計宣」と僧正すなわち良弁とともに実忠に対して「宣」

する立場であった。加えて、第一三条では「被_二親王禪師教_一僞」とあり、第一七条では「親王禪師教垂」と記されている。

ただし、山田英雄氏⁽¹⁸⁾は「実忠二十九ヶ条」の第二〇条をも挙げておられるが、この条の解釈にはかなり無理が存在し、山田氏の史料の誤読がみられる。第二〇条には、

一、奉_二仕_一 朝逆_二事_一。

合十九年 自_二天平勝寶五年_一至_二神護景雲四年_一。

右平城宮御宇天皇。朝逆宮禪師例奉仕如_レ件。

とある。ここに見える「平城宮御宇天皇」を『三代実録』元慶八年（八八四）一月廿四日条によって光仁天皇に比定され、「朝廷宮禪師」を皇子の禪師と解されて早良親王といわれる。

このことについては、船ヶ崎正孝氏⁽¹⁹⁾・山岸常人氏⁽²⁰⁾の批判があるが、私見においても山田氏の見解には従いかねるのである⁽²¹⁾。そして、山田氏はこの記事より、早良親王・光仁天皇と実忠の關係について、即位前の天平勝寶五年（七五三）にまで遡って考えておられるが、宝龜年間以前の両者の交流に関しては史料に認めることは出来ず、まして光仁天皇との關係は一切確認することは出来ない。

しかし、この「実忠二十九ヶ条」の記載を見る限り、早良親王は実忠に対して「宣」したり、「教垂」する立場に有ることが判る。そして、このことを見る限り師弟の立場が逆転してい

るとしか思われない。これは、たとえ親王と一東大寺僧という立場を考慮に入れても、単純に両者の年齢差は十八歳或いは二十三歳であり、普通の師弟關係では理解し難いことである。ただし、早良親王と実忠の間には本来師弟關係が存在していなかったと解するならば、何等問題は無くなる。

従って、早良親王と実忠の師弟關係、さらに等定と実忠との師弟關係は、等定と早良親王の師弟關係を前提に生じたことであらう。すなわち、本来伝承されていた等定と早良親王の師弟關係に対して、「実忠二十九ヶ条」に早良親王の名がみえることから実忠と早良親王の師弟關係が生じ、それと同じ様に両者の共通の師として実忠の存在が主張されたのではないだろうか。すなわち、実忠については「実忠二十九ヶ条」の第二一条に「奉_二仕_一華嚴供大學頭政_二事_一。」とあることも一つの要因として、華嚴の学匠であった等定と実忠の關係が生じたのではないかと考えられる。

そうすると、「記文」等に記されている大安寺東院への移住という問題が残る。すなわち東大寺での出家・受戒を記す史料であっても、大安寺東院への移住を記しており、早良親王が大安寺東院に住していたことは、かなり可能性の高いことといえる。そうすると、等定に関しても東大寺ではなく大安寺への遊学の可能性が大きいことから、等定と早良親王は大安寺を通じ

て共通点を見出すことが出来るのではないだろうか。そして、その師弟関係を明確に証明することはできないが、伝承として両者の師弟関係が伝えられていた可能性がある。その後、早良親王が先にみたように御霊として畏怖され、御霊信仰が盛んとなるに伴って早良親王が寺家の僧であったとする東大寺の主張が行なわれるようになったという推測ができる。むしろ、歴代別当に加えられていた等定との師弟関係の伝承によって、早良親王をも寺家の僧とするようになったのではないだろうか。

三、等定と桓武天皇

等定と桓武天皇との関係については、先に挙げた『三国弘法伝通縁起』に「師範」として記されているが、その前後の関係文を以下に引用すると、

實忠上足有^二等定大僧都^一。是桓武天皇御師範也。桓武天皇東宮已前於^二龜瀨山峯^一師子現^二無畏之身^一。大聖示^二老翁之姿^一。師子復^二本形^一顯^二童子之形^一。必是五髻文殊童子。等定拜^レ之奉^レ進^二臨幸於寺^一。乃河内國西林寺也。彼寺是天智天皇之御願。等定即是彼寺住僧。東大寺爲^二本寺^一。習^二學華嚴^一。講敷不^レ倦。桓武天皇踐祚之後修^二造西林寺^一興^二隆東大寺^一。顯^二揚華嚴^一紹^二續圓宗^一。即以^二

等定大僧都^一補^二東大寺別當^一。等定大興^二宗教^一建^二眞俗^一。延暦十九年等定奄逝。春秋八十有餘。

とある。この記載は、多分に説話的な要素を含むものであるが、実はここにも等定の経歴が記されており、東大寺を本寺とするとともに、河内国西林寺（西琳寺）に住していたことが記されている。中世の東大寺にあっても等定が西琳寺僧であったということは周知の事実であったようである。ただし、ここでも東大寺との関係が記されているが、等定が東大寺僧ではなかったとするならば西琳寺に等定がいつ頃から、何故住することになったのかは全く記されていない。すなわち、本来東大寺僧ではなかったとするならば西琳寺移住の時期が記されていないくても何等不思議はなく、むしろ作爲的に東大寺僧であったことが捏造されていた可能性の方が大きいであろう。

では、何故等定が東大寺僧であった、あるいは東大寺別當となったという伝承が生じたのであろうか。これはここに記される桓武天皇との関係が大きく関係しているのではないだろうか。桓武天皇との関係についてその親密さを示す記載が前にも挙げた『日本後紀』延暦十八年（七九九）十二月庚寅条に記されており、

庚寅。大僧都傳燈大法師位等定言。側・力劣則止。著在^二兵典^一。心慚不^レ極。光^二于彝倫^一。等定落^二髮玄門^一。棲^二

形檀林^一。羞^二戒婆離^一。恥^二智鷲子^一。豈須^下辱帶^二綱任^一。久乱^中維務^上哉。恥方^二濫吹^一。恐同^二踐火^一。是以懸車之歲。數陳^二口辭^一。不被^二詔許^一。既經^二數年^一。當今年垂^二八十一^一。步行不^レ正。進退失^レ儀。強以抱^レ任。慙^レ天愧^レ地。庸身無^レ厝。伏願去^二大僧都^一。以開^二賢路^一。逃息^二老情^一。兼望當糧。上崇^二養老之德^一。下免^二戶位之剋^一。不任^二漚歎之至^一。上奏以聞。

と、僧綱を辞さんことを願ひ出た等定に対して、桓武天皇自ら詔によって答えており、

詔報曰。忽省^二來表^一。知^レ辞^二綱任^一。委寄未^レ幾。告^レ老何早。歎^二慕其德^一。感懷无^レ已。但退讓再^三。謙光難^レ逆。故許^レ所^レ請。以遂^二來意^一。其梵釋寺事者。休息之閑。時加^二檢校^一。時寒。想和適也。指不^二多云^一。

と、その大僧都辞任を認めた上で梵釈寺のことに關しては、休息の閑に檢校を加えんことを命じている。等定が僧綱の一員となつたのは延暦九年（七九〇）のことであり、先に見たように「懸車之歲」すなわち七〇歳という高齢での僧綱入であつた。その七年後の延暦一六年（七九七）には大僧都に任じられており、大僧正就任後僅か二年後の辞任ということになる。實際に等定が綱務にいかほど関与できたかは不明であり、年齢からすると名誉職としての就任であつた可能性も捨てきれないので

はないだろうか。

等定が桓武天皇に檢校を命じられた梵釈寺の創建は『続日本紀』延暦五年（七八六）正月壬子条に、

壬子。於^二近江國滋賀郡^一。始造^二梵釋寺^一矣。

とあり、この年より造営がはじまっている。その後、同書延暦七年（七八八）六月乙酉条では「下総越前二國封各五十戸」が施入され、さらに『類聚三代格』卷第十五「寺田事」に収録される延暦一四年（七九五）九月一五日勅には、

勅。眞教有^レ属。隆^二其業^一者王。法相無邊。闡^二其要^一者佛子。朕位膺^二四大^一。情存^二億兆^一。導^レ德齊^レ禮。雖^レ遵^二有國之規^一。妙果勝因思^レ弘^二無上之道^一。是以披^二山水之名區^一。草^二創禪地^一。盡^二土木之妙製^一。庄^二飭伽藍^一。名曰^二梵釋寺^一。仍置^二清行禪師十人^一。三綱者在^二其中^一。施^二近江國水田一百町^一。充^二下総國食封五十戸越前國五十戸^一。以前充^二修理供養之費^一。所^レ冀運經^二馳驟^一。永流^二正法^一。時變^二陵谷^一。恒崇^二仁祠^一。以^二茲良因^一。普爲^二一切^一。上奉^二七廟臨^二寶界^一而増^レ尊。下覃^二万邦^一。登^二壽域^一而治^レ慶。皇基永固卜^レ年無^レ窮。本校克隆中外載逸。免該^二幽顯^一。傍及^二懷生^一。望^二慈雲而出^二迷途^一。仰^二慧日^一而趣^二覺路^一。主者施行。

延暦十四年九月十五日

と、その創建理由が記され、近江国の水田一〇〇町の施入、清行の禪師一〇人が置くことなどがみえる。すなわち、梵釈寺は桓武天皇が仏法興隆のために創建したものであり、その寺の檢校を任されたということからも等定と桓武天皇の間には浅からぬものがあつたことが伺え、その信頼の程が知られる。

また、西琳寺であるが先に挙げた「西琳寺文永注記」の「栢原天皇奉願盧舎那丈六佛」という記載についての惣持の見解の詳細は、

私曰。奉願毗盧舎那者崇重之意歟。天平年中記正載此像延曆年中記云朽損云。若栢原御造立者。延曆以後不經年序。何有朽損哉。定知不桓武造立也。

と注記しているが、桓武天皇による造立という点については否定しているが、この毘盧舎那仏像に関しては桓武天皇との関係を示唆している。さらに、「西琳寺流記」の「一當寺諸堂建立事」には、

一講堂 桓武天皇光仁太子延曆年中建立也。但再興歟。（以下略）

とあり、この講堂の本尊は「盧遮那仏」であり、講堂自体についても桓武天皇の造立もしくは再興の記載がある。すなわち、等定が本来所屬していたと考えられる西琳寺と桓武天皇との間に何等かの関係があつたということの想定が可能となるが、これは先にみた西琳寺が王仁の末裔を称する渡来系の氏族である

西文氏の氏寺であつたということが大いに関係していると考えられる。これは、『三国仏法伝通縁起』に記された説話も併せ考えると、等定と桓武天皇との間には西琳寺を通しての交流というものが考えられるであろう。

桓武朝における渡来系氏族の優遇は周知の事実であるが、これは桓武天皇の母である高野新笠の出自が大いに関与しているといわれている。高野新笠の出自は和氏であり、和氏は「出自百濟武寧王之子純陀太子²⁴」と伝えられる渡来系の氏族であつた。また、林陸朗氏が明らかにされたように、桓武朝の後宮については渡来系である百濟王氏の出身者が三人も含まれている。²⁵

そのために渡来系の氏族の優遇措置が採られており、西文氏も決して例外ではなかつた。そして、等定が西文氏と何等かの関係を有するとするならば、当然桓武天皇との関係も親密になるであろうことは想像に難くなく、その結果として等定の僧綱入りを含めて、「師範」と称する伝承が生じるほどの関係が伝承されるに至つたのであろう。

さらに平安時代以降、東大寺は聖武天皇の発願により鎮護国家のために創建された寺院であるのに対して、光仁天皇の即位により聖武天皇をはじめとする天武系の皇統から天智系への皇統の交替が生じている。そして、延暦八年（七八九）に造東大

寺司の廃止⁽²⁶⁾が行なわれ、弘仁三年（八一二）には「官家功德封物。停^レ收^二東大寺^一。收^二造東西二寺諸司^一。出納充用之色。

一依^二前例^一」⁽²⁷⁾という東大寺の封戸のうち官家功德分二〇〇

〇戸⁽²⁸⁾が停止されて官戸に収納されるという措置が採られるなどの、政府の東大寺に対する政策の後退がみられる。そのような情勢の中で、平安時代における寺家の立場をより有利にするために、桓武天皇との密接な関係を有する等定を、その華嚴宗の法脈より歴代別当に加えて権威付けが行なわれたのであろう。

このことは「別当次第」に第一〇代の別当として湛久君なる人物が記され、「良惠資 延暦十四年乙亥任。延暦皇子」という注記がみられるが、どの様な人物か他の史料にはみえずその詳細は不明である。これなども延暦皇子すなわち桓武天皇皇子が別当であったという一種の権威付けであろうと考えることは容易である。

おわりに

以上、等定に関して実際に別当であったのかどうかをはじめ、根本的な問題として、果たして等定が東大寺僧であったのか、早良親王との師弟関係などについて考察を加えてみた。その結果、東大寺と等定との間には積極的にその関係を証明する史料

は存在せず、『要録』などの史料をみる限りはその関係は捏造されたものである可能性の方が遙かに大きいといえる。

そして、早良親王との師弟関係も等定が東大寺僧ではなかったとすると、当然東大寺における両者の接触は考えられない。ただし、その可能性としては、等定・早良親王ともに、前者はその出自から、後者は「碑文」をはじめとするその略伝が記された史料により大安寺における接触の可能性が推測できる。すなわち、等定の場合は本来は西文氏の氏寺である西琳寺に所属し、その関係から大安寺に遊学した可能性が生じる。そして、早良親王の場合は大安寺において得度を受け、大安寺を所屬寺院とする僧であったが、親王宣下後に東大寺の運営に参加するなど全く東大寺とは無関係ではなかったことから、御霊信仰の展開とともに東大寺僧とされた可能性がある。その過程で、早良親王の師であったという伝承の残る等定も東大寺僧として記録されたのかもしれない。

付け加えるならば、「舊次第」にその名が見える者は、その実在が確認できないものも居るが、この内初期の別当が華嚴宗であることから、華嚴宗の僧がその法脈を基に書いたのではないかという永村真氏の見解⁽²⁹⁾を認めてよいと思う。さらに、「舊次第」に空海・真済等の初期の真言宗の重要人物が含まれている。これは平安時代以降の仏教界における密教の占める割合が

大きく、その名によって東大寺及び東大寺別当の権威付けが行われたものと考えられ、同様に桓武天皇との関係によって等定の名が含まれたと考えられるのではないだろうか。

すなわち、光仁天皇即位による皇統の天武系から天智系への移行に伴い、天武系の聖武天皇によって創建された東大寺は、平安時代初期における天台・真言両宗の隆盛、藤原氏の繁栄を背景とした興福寺の勢力に対抗する意味を持って、桓武天皇の師範とされる等定が別当として歴代に含まれることで自らの権威を高めようとする東大寺側の思惑があったことも否定することはできないであろう。

註

- (1) 岸俊男「良弁伝の一齣」(同『日本古代文物の研究』所収、一九八八年、塙書房、初出は『南都仏教』第四三・四四號、一九八〇年)。
- (2) 佐久間竜「等定」(同『日本古代僧伝の研究』所収、吉川弘文館、一九八三年、初出は「東大寺僧等定について」として『日本歴史』第二八五号(一九七二年二月)に掲載)。
- (3) 西口順子「梵釈寺と等定」(『史窓』第三六号、一九七九年)。
- (4) 山田英雄「早良親王と東大寺」(『南都佛教』第一二號、一九六二年)。
- (5) 加藤優「良弁と東大寺別当制」(奈良国立文化財研究所創立三〇周年記念論文集『文化財論叢』所収、同朋舎、一九八三年)。

- (6) 特に管見に触れたものとしては、①堀池春峰「弘法大師と南都仏教」(同『南都仏教史の研究』(下 諸寺篇) 所収、法蔵館、一九八二年)、②牛山佳幸「諸寺別当制の展開と解由制度」(同『古代中世寺院組織の研究』所収、吉川弘文館、一九九〇年)、③永村真「中世東大寺の組織と経営」(塙書房、一九八九年)が挙げられる。

- (7) 吉田靖雄「奈良時代の得度と受戒の年齢について」(『続日本紀研究会編『続日本紀の時代』、塙書房、一九九四年)。

- (8) 佐久間氏の前掲書においては等定を養老五年の誕生とされ、これは坂本太郎・平野邦雄監修『古代氏族人名辞典』(吉川弘文館、一九九〇年)にも採用されている。これは等定の上表文中の「懸車之歳」ということよりも、「當今年垂二十八」を重視された結果であるが、本稿においては前者の表現を重視したい。

- (9) 佐久間 前掲書、一八四頁。

- (10) 実忠に関しては稿を改めて詳しく論じたい。

- (11) 「実忠二十九ヶ条」の成立については奥付通りに弘仁六年に成立したもの、あるいは実忠の手によって数度にわたって書き加えられていったもの、弘仁六年に実忠により書かれた部分を中心にして実忠顕彰のため関係史料が収録整備され成立したなどの指摘がある。

- (12) 「要録」の「別当章」以外にも、「東大寺別当次第」と称される史料があり、単に「別当次第」と称する場合は、それら歴代別当を記す史料を一括して示す場合にこの呼称で表記することとする。

- (13) 佐久間 前掲書、一九一〜一九三頁

- (14) 井上光貞「王仁の後裔氏族と其の仏教―上代仏教と帰化人の関係に就ての一考察―」(同『日本古代思想史の研究』、岩波書店、一九八二年)
- (15) 佐久間 前掲、一八六頁。西口 前掲、三頁。
- (16) 『扶桑略記』抄二の神護景雲四年(七七〇)八月廿六日乙卯条に「以慈訓法師復任少僧都。慈訓河内人也。(中略)慶俊。河内人也。俗姓藤井。(以下略)」と記され、特に慶俊については『日本高僧伝要文抄』第三所収の『延暦僧録』第五の「智名僧沙門釋慶俊傳」に「河内人也。俗姓藤井」とみえる。なお、慈訓・慶俊ともに佐久間前掲著書に論稿が収められている。
- (17) 『大日本古文書』四卷一九九頁、六卷四六六頁、なお「奉寫一切經料墨紙筆用帳案」の宝龜二年(七七二)九月の項目に「廿五日下午紙六張表紙充内親禪師御院付刑部廣濱」とみえる(一八卷四五七頁)が、ここにみえる「(内)親禪師」を親王禪師の誤写とするならば、宝龜二年より親王禪師と称されていたこととなる。
- (18) 山田 前掲論文、七四頁。
- (19) 舟ヶ崎正孝『国家仏教変容過程の研究』雄山閣、一九八五年
- (20) 山岸常人「東大寺二月堂の創建と紫微中台十一面悔過所」(『南都佛教』第四五號掲載、一九八〇年、のち「二月堂の成立」として同『中世寺院社会と仏堂』(塙書房、一九九〇年)収録)。
- (21) 詳細については別稿を期したいが、簡単に述べると、「平城宮御宇天皇」はここに記された期間、天平勝宝五年(五七三)から神護景雲四年(七七〇)の間に即位していた天皇のことであり、それに合致するのは太上天皇としての期間が存在するものの孝謙天皇(重祚後は称徳天皇)しか存在せず、「朝廷宮」の
- 禪師ということからも光仁天皇との関係は見出し難い。
- (22) 『続日本紀』延暦九年九月辛未条。
- (23) 『続日本紀』延暦十六年正月辛丑条。
- (24) 『続日本紀』延暦八年(七八九)明年正月壬子条。
- (25) 林陸朗『桓武朝論』(古代史選書7)雄山閣、一九九四年、五八〜六二頁。
- (26) 『続日本紀』延暦八年(七八九)三月戊午条。
- (27) 『日本後紀』弘仁三年(八一二)十月癸丑条。
- (28) 東大寺の封戸については、『続日本紀』天平勝宝二年(七五〇)二月壬午条、および天平宝字四年(七五二)七月庚戌条にみえる。
- (29) 永村 前掲書、二四頁。